



男は 痛い !

國友万裕

第9回

HK／変態仮面

1. 善意の暴力

今、思い出しても、怖い経験がある。あれは不登校になって、1カ月くらいの頃だったと思う。

あの頃のぼくは、毎日、一日を乗り越えるのがやっとの生活をしていた。学校にはどうしても行かれない。無理に行った日も、いたたまれなくて、鞆も自転車も学校に残したまま、休み時間に学校から逃げてしまった。ぼくが数日だけ通った高校は、田舎のほうにあって、近くには公衆電話もない。川べりの道をてくてく歩いた。1時間近くも歩いて、やっと公衆電話が見つかって、母に電話。「今、学校を抜け出してきた。先生に何も言わずに来たから、学校に電話しといて……」。母のつらい顔が目につかんだ。

当時の担任の先生には感謝している。30代後半くらいの男性で、理解してくれる人だった。苦手な体育の授業には出なくていいと言われた。カウンセラーの先生にもわざわざ会いに行ってくれた。飾り気はないけど、優しさをもった人だった。奥さんに早くに死なれて、男手一つで息子を育てていた。自分のことを、「僕は」とか「私は」ではなくて、「俺は」というところも好きだった。しかし、この先生でも、不登校のことは何もわからない。まだ不登校という言葉もない時代。精神科に行っても話にはならない。カウンセラーは公立の児童相談所だけ。他県まで、母と一緒に出向いたこともあったが、そこでも何の糸口も見出せないのである。

あの当時のぼくは、学校に行っても、女子から悪口を言われているのではないかと

妄想が広がって行って、座っていることすらできないような心理状態に陥っていた。でも、学校は行かなきゃいけない。日本は学歴社会。高校も出ていなかったら、一生惨めな思いをすることになる。当時は、大検なんていう制度があることすら知る人は少なかった。「明日、何か奇跡でも起きてくれて、心が変わっていたら」。藁をもすがる思いで、生きていた。しかし、ぼくの心はもはや完全に壊れてしまっていた。すぐに治るような病ではなかったのだった。

15歳の子が、平日の昼間に町を歩いていると補導される。近所の人からは白眼視される。外にも出ることができない。そんなある日のことだった。家の部屋に閉じこもっていると、「学校の人 coming いるよ」と母の声。外を見ると、ぼくのクラスメイトたちが、ぼくをどうにか学校に来させてあげようと、大挙して訪れたのだった。男子は、わずか2人。女子はクラス全員だった。もちろん、彼女たちに悪気はない。ぼくは高校には3日くらいしか行っていないので、ぼくのことなんて彼女たちはほとんど覚えていないはずだ。まだぼくのことを好きだとか嫌いだとか言える段階ではない。

おそらく、これは、野球部のマネージャーをやっていた女の子の提案だったのだろう。3日しか高校に行っていないぼくにも、彼女の印象は残っていた。『キューポラのある街』の吉永小百合のようなタイプの子で、前向きで、健気な優等生。おそらく彼女が、「皆で行ってあげましょうよ」と提案して、こういうことになったのだろう。

女たちの群れ！ 怖い！！ ぼくは、裏口から外に出ると走りに走った。本屋さんのお

ぼちゃんにかくまってもらおうか。でも、あのおばちゃんでも、学校に行かれない気持ちは理解してくれないだろう。ぼくはタクシーを拾った。「おばあちゃんのところに行こう」。ぼくは小銭ももっていなかったのだが、おばあちゃんは家にいるだろうから、おばあちゃんに払ってもらえばいい。そう思った。30分くらい、おばあちゃんの家まで、タクシーに乗った。幸い、タクシーの運転手さんは親切な人で、ぼくがお金をおばあちゃんにもらいに行くのを待っていてくれた。

あの時のことを思い出すと、今でも心臓の鼓動が聞こえてくる。あの怖さをわかってくれる人はいるだろうか。女子たちが集団となって押し寄せる。おそらく男子たちは、他人事はどうでもいい。ぼくのことを知っているわけでもないし、学校に来ようが来なかろうが、どうでもいい。だから野球部の彼女が誘っても、のっかる子は2人しかいなかったのだろう。しかし、女子は、リーダー格の子が、「行ってあげましょうよ」と言いだすと、全員がそれに同調してしまうのだ。

もちろん、この時の彼女たちは善意。しかし、これは善意の暴力なのである。そして、善意がひっくり返って悪意になった時、具体的には、誰か1人の女子がぼくのことを「気持ち悪い」と言い始めた時、恐ろしい集団の悪意が始まっていくのである。

2. 女性の暴力性

ぼくは今だったら、間違いなく発達障害・自閉症スペクトラムと診断されるタイプの子だった。中学くらいからその傾向が顕著になり、クラスのなかで浮いていて、他の男の子

たちに同一化できなかつた。ぼくは中1の頃から、クラスの女子から気持ち悪いと陰口を言われ続けていた。中2になって、組み替えがあって、クラスのメンバーが代わっても、また新たな女子グループから気持ち悪いと言われ始めた。

ぼくは中学の2年生の秋に、クラス委員をやらされた。もちろん、友達もなく引きこもり、言葉も発することができないような子だったぼくに、クラス委員が向いているわけがない。当時のクラスの女子たちの集団の悪意による投票だった。気持ち悪いぼくをクラス委員にして、皆でからかって面白がるという作戦を彼女たちはたてたのだ。

この当時の担任の先生は、学年主任のベテランの男の先生。ぼくが選ばれたのは、彼女たちの嫌がらせのせいであることは、この先生にもわかっていた。先生はもう一度、選挙をやり直すことを生徒たちに強いた。しかし、彼女たちは言うことを聞かない。この先生は、決してなめられるタイプの先生ではなく、体罰を必要悪だと思っている先生だったので、時として男子には顔に手形の跡が残るくらいのピンタを5発くらいくらわせることだってあった。しかし、女子だとそれができない。彼女たちも女だから大して怒られないということはわかっている。また、「私たちは、國友君がクラス委員にふさわしいと思っているから選んだのに、先生は、ふさわしくないと思っていらっしゃるのですか」と、しらばっくられて、先生をやりこめることもできるとわかっている。そのことまで見抜いた上での悪質ないじめである。

女性の集団心理は、時としてすさまじいものとなっていく。昔から、魔女狩りなど、女

性が魔性の存在とみなされるのはそのせいなのだろう。時として、女性は男が制御できないような暴力性を発揮するのである。

3. 女の魔性

「時々、理屈とはあわないようなことで、怒ってしまうことがあります。それは私も女の問題として感じることもあるんです」。以前、関わっていたグループで、ある女性が自ら述懐していた。おそらく女性たちは、魔性に襲われて、時として理不尽なことをしてしまう。大人になった女性ならば、しばらくたった後、そういう自分に気づいて、恥じってしまうのだと思う。

あれは大学2年生の冬休みだった。ぼくはある人にノートを貸してもらうために学校のキャンパスにいた。すると、1年生の頃、ゼミでぼくと同じグループだった女の子が、ぼくの姿を見つけて話しかけてきた。

「授業ないのに、学校来てんの？」

ぼくの顔色を窺うような、話しかけ方だった。彼女らしくもない。大学の1年の秋、ゼミの発表の打ち合わせの時間に、教室に行った時のことだ。ぼくの発表グループは、女子は彼女ひとりで、男子がぼくをいれて3人だった。待ちあわせの教室に来ていたのは、彼女とぼくのみで、他の男子2人はさぼっていた。2人で話し合いをしなくてはならないのだが、彼女のほうは、何故か怒ったような様子で、ぼくとまともに向かい合おうともしない。結局、話し合いはできないままになってしまった。どうやら、彼女の友達の一部がぼくの悪口を言いだしたみたいで、それが彼女に伝染したようだった。ぼくはそれまでにも

何度も同じような経験をしているので、大学生になっても女は相変わらずだと思ったものだ。(やはり、女は怖い！)

しかし、それからしばらくたって振り返ってみて、彼女はおそらく自分の方が悪かったと気づいたのだろう。今にして思えば、あの時、ぼくは、彼女を無視して、意地悪してやったほうがよかったのかもしれないと思う。彼女が謝りでもしない限りは、口をきいてあげないと毅然とはねのけたほうがよかったのかもしれない。彼女がしたことを考えれば、それくらいのリベンジは許されるはずだ。しかし、あの当時のぼくは自尊心が極限まで落ちていて、当然の自己主張をすることもできなくなっていた。

「友達にノートを借りに来ているんだ」とぼくは答えた。

4. あえて女性を批判する理由

この原稿がアップされる頃には、対人援助学会の全国大会は終わっているはずだ。今回は、「傷ついた男性性からの回復」その②と題して、主として女性ぎらいを語ることになる。こんなことをして、女性の参加者に嫌われるだけのことなのかもしれない。しかし、ぼくは、一度は話さなくてはならないと思っていた。

誰が何と言おうと、ぼくには女性を批判する権利がある。少年の頃の1年は、大人になってからの5年に相当すると言われている。ぼくは少年の頃、ずっと引きこもっていたので、普通の人よりも軽く20年以上は遅れている。実際、ぼくが女性から傷つけられた体験を、こうやって語れるようになったのは、4

0代の半ばになってからなのである。

若い頃は、むしろ、少年時代の忌わしい経験は消してしまおうと思って生きていた。ないものとしてしまおうと。しかし、それはできないことがわかった。無理に女性と付き合いおうとしたこともあったが、若い頃のぼくはまだ自我がない子供のような状態だったため、むしろ女性への恐怖を深めてしまうことになった。自分の過去を消化し、自我を確立しなければ、女性とは付き合えないのだ。

思えば、ぼくの人生は孤独だった。女性どころか、男友達もいない青春時代だった。そんなぼくが徐々に男友達とスタンド・バイ・ミー的な関係を紡げるようになったのは、40くらいになってからである。本当に遅い。しかし、それも仕方がなかったのだ。ぼくは決して努力しなかったわけではない。むしろ、普通の人ができなくていい苦労を山のようにしてきたという自負がある。そもそも、発達障害に生まれたのはぼくのせいじゃない。だけど、ぼくは心ない女子たちや教師たちから、理不尽に傷つけられてきた。いったん、心が壊れてしまうと、それを治すには膨大な時間がかかる。トラウマを治すためのマニュアルも存在していない。ぼくは試行錯誤を繰り返しながら、どうにか心の置き場を見つけ、一進一退にしか回復しない心と30年以上も闘ってきたのだった。

気がついてみたら、もう来年の2月で50歳になる。幸い、男友達はたくさんできた。闘いも最終段階まで来ているのだろう。しかし、女性への不信感はまだ消えていない。そして、このことを訴えても、大抵の人はわかってくれない。

「それは一部の女性のしたことですよ」

「そんなことばかり思い出していたら、憎しみが余計に大きくなって行っちゃいますよ」

「あなたが女に負けたくないという意識をもっているからじゃないの。男性優位主義思考を治せば、いいんじゃないの」

「男の人は見えない権力を握っているんですよ」

援助をしている人たちがこんなことを言うのである（怒）！！！ こんなことを言われても、ぼくのトラウマが治るわけがない。むしろ感情を否定され、余計にぼくは傷つくことになる。

それは一部の女性のしたこと？ それを言うのだったら、セクハラだって、DVだって、一部の男のしたことには過ぎないのでは？ だけどフェミニストは、あたかも全ての男性のしたことであるかのように男を批判してきたのでは？ 痴漢だって一部の男がしているに過ぎないのを、男は全部、女性専用車両には乗せてもらえないのだ。ぼくを傷つけたのが1人や2人の女性だったら、一部の女性の問題と言われても仕方がない。しかし、ぼくは複数の女性集団からそういう目に合わされている。したがって、女性への恐怖というよりも、女性性への恐怖がぼくのなかには根付いているのだ。

そんなことを思い出していたら憎しみが大きくなる?? ぼくだって、憎しみを消そうと懸命に努力してきた。しかし、憎しみから目をそむけても憎しみは消えない。そうであるのならば、徹底して憎しみと向かい合うしかない。ぼくにとっては、いたし方のない選択だったのだ。

男性優位主義?? ぼくが、男性優位主

義と思っているの!? もし仮にぼくが男性優位主義の価値観をもっていたとしても、女は何をしても許されるということにはならないのでは? ぼくが女の子からいじめられていた頃、早くに親に相談していたら、不登校までにはならなかったはず。ぼくが言えなかったのは、男性優位主義ではなく、男性差別のせい。男は女よりも強くなくてはという価値観があるから、「男のくせに女にいじめられる奴があるか!」と言われることは目に見えている。余計に自尊心を傷つけられることはわかっているから、ぼくは誰にも言えなかったのだ。

男の人は権力を握っている???? ぼくはこれまで結婚もしていないし、仕事もずっと非常勤を貫いてきた。これからもおそらくそうなるだろう。女性に権力をふるったりできるような立場について一度もない。いつだって女性に気を遣って、小さくなって生きてきたぼくが、ただ生物学的に男だという理由で、権力者扱いされるのは筋違いである。

ぼくは辛酸をなめるような経験をした。女性によって心を壊された。それを女性にぶつけることで、ぼくは彼女たちに気づいて欲しいと思っている。15年ほど前にあるフェミニストから、「男の人は何気ない気持ちでしていることであっても、女にはセクハラと感じられることがあるのよ。」と言われたことがある。それを言うのならば、逆もまた真なり。女の人が無気ない気持ちでしていることが、男を深く傷つけることだって、絶対にあるはずなのだ。今回の発表は、女性に喧嘩を売るためではない。あくまでも女性に理解してもらうため、そして、もうぼくみたいな不幸な男を

生み出さないための女性批判である。

上手く行けばいいけどなあー。今、ぼくは不安1割に期待1割、そして、誰もわかってくれないのではないかというあきらめ8割の混じり合った気持ちの中にいる。おそらく誰もわかってくれないというのがぼくの偽らざる予想なのだ。ジェンダーの問題なんて言うのは一端囚われてしまった時点で負けだ。ジェンダーは理不尽な部分がたくさんあるにも関わらず、普通の人はそこまで深く考えずに生きているため、理解してもらうのがきわめて難しい。

ただ、大勢の人にぼくの傷つき体験を語ることで、少しでもぼくの心の中に新たな一筋の気づきが生まれてくれることを祈るのみだ。そして、女性へのわだかまりが多少でも消えてくれればと祈っている。そのかすかな光のような願いのために、ぼくはあえて発表するのだ。

5. 時には、何も考えずに『HK/変態仮面』

結局、ぼくはジェンダーに囚われ過ぎている。でも、それは仕方がなかった。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができず、女の子からも馬鹿にされるタイプの子だったので、ジェンダーに反発していた。時を同じくして、マスコミからはウーマンリブという言葉が盛んに流れて行き、男女平等だ、フェミニズムだと言われ始めた。ジェンダーに反発していたぼくは、当然のここのようにフェミニズムにとびついた。フェミニズムを勉強することで、ぼくのコンプレックスをどうにかしようと思った。

先日、ぼくのところにやってくるマッサー

ジの男性から、「國友さん、小説書いたらどうです。ぼくとの関係でもかまわないし、ぼくたちのやりとりだけでも、結構面白い話になりそうじゃないですか」と言われた。

ぼくの男友達のなかで、今一番頼りになるのは彼だ。何かあった時はすぐにかけてくれる。他にも親しい友達はあるが、皆、遠方に住んでいるので、すぐというわけにはいかない。彼は、スポーツクラブのインストラクターもしていたことがあって、身体はヘラクレスだが、性格的には優しいタイプだ。権力には関心がないと言っていた。ただ、身体を動かすのが好きだし、人の身体にマッサージしたり、トレーニングしたりする仕事は好きだと話していた。

この頃、マッチョという言葉は、身体に特化するものになってきた感がある。マチズモとは男らしさの誇示のことであり、必ずしも身体のことではなく、性格的マッチョ、社会的マッチョ、経済的マッチョ、性的マッチョの意味もあると思うのだが、この頃はもっぱら身体のことを意味することと思っている男性が多いみたいだ。

これは逆に言えば、身体的以外のマッチョが必ずしも肯定的ではなくなっているせいだろう。性格的に男らしい男といっても、今の若者にはピンとこない。ぼくが『マッチョになりたい！？ 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』を出した後、「これから身体をトレーニングしてマッチョになろうと思っています」と、出版の際にお世話になった女性にメールした。すると、彼女からは「性格までマッチョにはならないでくださいね」という返事が来た。

今となっては性格的なマッチョなんて、ネ

ガティブな意味でしかない。前にぼくの友人が、「マッチョとは、他人の都合よりも自分の都合を優先させる人のことだ」と定義していた。要するに、マッチョは自己中で他人の気持ちを考えないだけのことだ。

社会的・経済的マッチョにしても同じこと。昔みたいに終身雇用と年功序列、家族的な義理人情に支えられた社会だったら、そういう性格の人も頼りになる親分として受け入れられていたのだろう。しかし、今みたいに合理化で、人を物みたいにドライに切り捨てるのが当たり前の世の中になってくると、こんな男は困るのである。マッチョな人が権力を握ると、自分の都合で物事をすべて進めてしまい、権力のない人はドライに切り捨ててしまう。不況で失業者が増えて、理不尽な仕事でのプレッシャーや過労から自殺や精神病院に追い込まれる人が後を絶たない時代だ。一部のマッチョが世の中を牛耳っているから、下流の人たちが苦しまなくてはならないのだと考える人が増えているように思う。社会的マッチョは賞賛的ではなく悪者である。

また性的マッチョも、この頃は必ずしも歓迎されない。セクハラは基本的に女性の主観を基準にしているのだから、好色過ぎる男は、摘発されることになる。

むしろ、ジムやプールに通って、身体をマッチョにすることをエンジョイしているくらいの方が、罪がない。他人に危害を与えないからである。この頃、細マッチョという言葉が定着してきたが、これは男が女の好みを取りこんでいることを示している。一般に筋肉質の身体に憧れるのは女性よりも男性で、女性はむしろ、男の汗や臭いを感じさせない小ぎれいなボディを好む。男性的過ぎる身体

は、女性に恐怖心を与えるのである。マッチョな身体になりたい男と男性的過ぎるのは嫌いだと思う女、両者の妥協点が細マッチョなのだ。ほどほどにマッチョということか。

あー、いけねえー。俺は、こんなふうで、ジェンダーの問題と言うとあれこれ理論づけて考えてしまうので、逆に身動きができなくなってしまっている。ぼくは賃借対照表のように男と女を並べて、男にとって損得ゼロの男女関係にしたいという衝動をもっている。しかし、損得で考えてしまうといつまでもぼくの苛立ちはおさまらない。今でも日本の学校では武道の授業は男子のみ、マラソンの距離は男子の方が長い、というところが多いみたいだ。韓国などでは、男のみが強制的に徴兵される。男性は女性よりも生活能力が低いと見做されるため、女性の方に非がある場合でも、離婚したら子供は女のものだ。あー、イライラ。

普通の男はそこまで考えていない。どっちみち社会は不公平なもの。男同士の間でも格差はあるのだから、男女格差くらいは仕方がない。それを訴えても社会は、すぐには変わらない。そうであるのなら、考えないのが一番だ。どうにもならないことは何も考えずに、楽しいことを考えた方がいい。だけど、ぼくは運悪く考える悪循環に陥ってしまい、なかなかそこから抜け出すことができないのだ。

ある日、マッサージの彼がお面をかぶって、ぼくの部屋にやってきた。もちろん、ぼくたちは男の友情で結ばれているから、スタンダード・バイ・ミーのおふざけである。「あ、変態仮面だね」とぼくが言うと、「スパイダーマンですよ(笑)」と彼。そうか、変態仮面なんて

マイナーだから、お面なんかは売っていないよなあ。「こういう楽しいことを考えるのがいいですよ」と彼。

その彼がぼくに推薦してくれた映画が『HK/変態仮面』（福田雄一監督・2013）という映画だった。

少年ジャンプに掲載されていたマンガの映画化なのだそうで、彼に面白いと言われて借りてみた。確かに面白いのだが、とにかくこの連載で、詳細に分析するのがお恥ずかしいくらいのお下劣コメディ。これだけ男の裸がたくさん出てきて、股間やお尻や乳首を強調するような描き方をしたら、R指定になっても不思議ではないのだが、マンガチックだし、男の裸だからいいかと一般映画になったのだろう。これも差別だなあ。男の身体だって、性的なものなのに……あ、また俺の悪い癖がはじまった（笑）。前回に続いて、今回も紙数がついてきたので、映画の分析については割愛することにする。（そのうち、『テルマエロマエ』や『あしたのジョー』などと比べて、詳しく分析したいとは思っているが。）

その代わり、失敗談を披露したい。この映画をDVDで見た後、ぼくは彼に『変態仮面』見たよ。面白かったよ」とメールした。いや、メールしたつもりだった。ところが、間違っ、仕事関連のMLに送っていたことがわかった（汗、汗、汗。。。）。このMLには女性もたくさん登録しているので、皆にそれが流れてしまう。。。。。。どうしよう一、どうしよう一、とあたふた思っていたら、どうやら、返信したメールアドレスが、そのMLに登録していたアドレスとは違っていたらしく、流れていないということがわかった（爆）。

とはいうものの、一瞬、顔は真っ青、心臓

が凍りつくような思いだった。そもそも、『変態仮面』なんて、ほとんどの人は知らないだろうけど、タイトルがタイトルなので、いかがわしいものと思うだろう。女性からセクハラと摘発されるかなあ（男は、損！）。いや、男だから、そういうDVDを観るのは仕方がないかと思ってくれるかなあ（こういう面では、男は、得！）。こう考えると、またまた男は得なのか、損なのか、わからなくなる（笑）。

ただ、この『HK/変態仮面』、卑猥系コメディ映画だけど、小栗旬が脚本に絡んでいる。そのことを説明すれば、女性の偏見も解けるだろうなあと思って、心を休めた。やはり、得なのは、イケメン男（笑）。ぼくはイケメンではないので、男は痛い！

でも、男も女も、たまにはこういうものを見て、ガス抜きするのはいい。真面目な理屈ばかり考えていたのでは、心は壊れてしまう。何も考えない時間をもつこと。それがぼくのこれからの課題だ。でも、達成するには時間がかかりそう（笑）。